

青森県高等学級地方史研究会編

青森県の歴史散歩

橋本正信

本書は、巻頭十七篇のなかから、本文の巻頭二篇と、
2として出版された「戦軍書」は、現在青森県高校に動員
し、研究、実践論文大整理している方はかなりである。
荒井清明、稲原克夫、橋本正一、大川智夫、橋本正史
河田益二郎、加藤邦夫、小笠原三三、佐藤仁、高野正雄、
高橋正雄、藤田幸太郎、舟田秀太郎、赤谷隆之、谷口
とてある。正史の著者、小笠原三三、加藤邦夫の著者
も名を連ねておられる。本書は正史の歩上称し、「橋本
正史」を重視して、そのことを記録する。先に出版された
宮崎直志著「青森県の歴史」が「旅の正史」を系統時
間的に記述している。上村正史は、本書は、「橋本正史」
を断片的、ポイントと本紙に記述したものと見られる。以
下、本書の特徴を、正史の若干の希望を述べよう。
い。

本書の正史の特徴は、橋本正史、「旅」と「橋」の正史
の細々などを巧みに使ったことにある。正史は、正史の
地図が豊富であり、交通手段、コース等の便を記述し、
執筆者が実際「旅」して来たという誇りがある。
正史は、正史の正史は、正史の「橋」にも記述し、

「中世以前に「城」の設置をうけ、豊後には「北原」が最も
の中心地であった」と述べたことであることは、「橋」の種
類として、本文記述中、とりしても物足りぬ部分を除
いて、より有力な例がある。「橋」については、歴史的位置
づけが捨てられてしまふと意見を結果の弊害處位と思ふ。
本書の七区分は次の通りで、まわり方は表目亦く裏目
まである。

「八戸とその周辺」、「十和田湖とその周辺」、「下
北半島」、「そとが浜」、「津軽の東根」、「東北
の京都の弘前」、「新田地帯と西海岸」。

この七の区分をさらに二十三の中区分にしている。
三戸一八戸一三沢一三本木原と十和
田一七戸一野田地一むの市一下北(東・北・西通り)一
豊泊と浅虫一青森一八戸田山一津軽半島一浪岡一深瀬石
川一弘前一岩木山一岩木川一平川一津軽新田一十三、小
泊一本造前田と霧風山一西海岸と版路。区分呼称につい
て言之げ、南部(表日本)は現部市名を使い、津軽(裏
日本)は川、山、新田を多く用いている。無理に統一す
る必要はないが、南部型でいくと津軽の「川」に沿って
る、黒石、五所川原「付近」としてもいいし、津軽型で
おれば南部の「く付近」を、馬淵川、小川原湖「に沿っ
て」にした方がよい。

中区分けさらに一八に小区分されている。「三戸付
近」を湖にとると、「馬淵川と九戸戦争」、「三戸城跡」、

「正虎碑と五輪塔」、「海馬の碑と番金橋」、「豊後へ
の道」、「南部利東堂墓」、「巻々井寺と宝光寺」、
「五戸の壺」という区画である。大体、史跡、文化
財を項目にすえ、その関連事項の説明と持っている。そ
の点から分がよい。史実にも忠実であり、伝説を異進解
する点、エピソードである。さらに、筆名を町名村の興元
筆名に改めるとする工夫も言だが、随所に見られる
「三戸城跡」は、三戸町にあり、後者が南部町にある因
縁である。前者が三戸町にあり、後者が南部町にある因
縁は前者へ、後者が三戸町正堂院の項は前者へ、それを
入れ替へた方がコースとして便利だ。また、前者の記
述文中「三ページの最後の行「右手下」は「左手下」の
間違い。

筆者はこの小区分の項目を原始、古代(近)、現代の鉄
の歴史に整理してゐた。当然のことながら、世世多々く、
それも弘前中世である。しかし、多少し、考古部内と南
部地方への視点があつてもいいのではないか。例としては、
本県が他県に誇れる「縄文の華」は晩期の長川、龜城岡
だけではなく、中期の田高もである。上北地方のニッ森
貝塚などはその代表だ。六ヶ所村の甕発に伴う緊急発掘
等の成果も当然触れられてよい。「六ヶ所」は原始と現

代の正史事象を參照する格好の散歩道に、でなければ本書に図示されてゐる「下北の考古学」程度の地図が、上北、出羽得れば各地域にあると散歩の面白さが増す。勿論、本書が日のある「大通り」の散歩を意図して正こと言頭か「あゆみ」の中で一応触れてゐる遺跡もあること「下北」巻末の索引には出ない）などから、欲とは思ふがやはり寂しい。さもなくば巻末の全国共通の文化史便覧へ一般的土器、古墳、仏像、建築様式の図に本界のものをあげ、その中で遺跡分布地図とか、各期の特徴を示す土器形態図の写眞などを載せれば方が有意義である。もっともこの便覧は、シリーズ本としての出版社の方針のいかも知らない。

本書の二の掲載は便利さにあつた。ポチントに入れた、初心者でも直に迷ふことなく「散歩」出来る点である。

「オホ増田」これは、二十三の中区分単位に一枚ずつあり、その地図中には小区分の項目（史跡、文化財）が全て図示されてゐる。場所によつては、さらに細部の地図（十三、小泊の相内付近、十三溪など）もある。城の形跡の図（弘前、八戸根城）などもありがたい。そして写真、二枚は、一一八の小区分の項目に一枚という原則のようで、執筆者が一つの踏査された足跡がよくわかる。大部分、当を得たものばかりであるが、一一一ページ「平館遺跡」は、灯台の築より、砲台跡そのもの

を出してしがるべきと思ふがどうか。

次にガイドブックとしての機能性である。各項目ごとの交通手段の明示がよい。重点を設けた所要時間まであるともつとよい。八戸、十和田、青森、八甲田、浪岡、平舘、相内、十三に史跡めぐりコースがあり、足の疲れた所要時間が明示されてゐる至極便利である。特に弘前が厚いのは不思議である。ここは、文跡が豊富で、平舘でも旅数を多くさいてゐる関係上、不必要と認めたのかも知れない。が豊盛館からこそ、簡潔旅行などの自主見学用モデルコースの史跡、史蹟、遺蹟、文学コースなどを設定もユニークな試みではなかろうか。加入で應々編入し全国内にネットワークのある遺跡をまとめたコース設定もあれば親切だ。にと思ふ。

その他、本書の便利さは等しい。民俗、良縁などの項目が随所に色どりを添へてゐることも、巻末には、各項目の指定無形文化財や公商施設、園、果木公園、参考文献、年表、索引があることである。

以上、私の批評は、非常に些細な面の指摘であり、このことによつて、本書の価値、執筆者の努力がいささかも減るものではない。本書をものにした先達諸氏の力量に敬意を表すると共に、本書が、県民の益ならず、多数の読者を全国にもつてあることを信じて致す。

（文庫刊三五一ページ、付録一八ページ）
四三〇の頁、山川出版社刊）